

花き

実況

1 キク

3月、4月上旬は寒い日が多く、4月上旬の気温は大野市の平均気温で約2℃低かった(表1)。4月中旬以降からは比較的、気温が高かったが断続的に降雨が続き、一部で春植え圃場の準備や定植作業に遅れがみられる。また、暮れ植え5~6月出し作型に用いられる夏ギクは、積算温度の到達に開花時期が強く影響を受けるため、開花は昨年より遅く、例年並みと思われる。

表1 大野市の4月上旬の平均気温

日付	気温(°C)			
	2017年		2016年	
	平均	最低	平均	最低
1日	6.4	1.8	12.7	4.8
2日	5.6	-1.5	15.3	7.8
3日	7.0	-1.2	16.7	15.2
4日	9.6	2.7	12.4	9.0
5日	12.8	3.4	10.4	5.4
6日	15.1	12.5	12.0	2.8
7日	14.4	12.4	13.8	10.6
8日	15.6	13.8	12.3	7.0
9日	12.5	6.4	13.3	4.8
10日	9.9	2.8	13.3	6.6
11日	10.8	9.3	7.5	3.4
	10.9	5.7	12.7	7.0

あわら市では暮れ植えぎくの芽立ちの品種間差あり、「川風」「清風」が悪い。草丈40~60cmで、一部の株は着蕾している。春植えギクの定植は4月18日頃から開始された。

病害虫では、アブラムシ微発生、ハウス内では白さび病が中発生。

奥越地区の秋植え夏ギクの芽成ちは品種間差があり、「あかね」、「小紫」等の品種では芽とびが多くみられる。不織布被覆自体は3月中旬ころに多くの圃場で行われた。被覆が行われなかった圃場では、「小鈴」、「シューペガサス」等は出芽が遅かった。春植えギクは4月18日ころから定植が始ま

り、昨年より早い。4月中旬の断続的な強風に、マルチめくれがみられた。病害虫では、ネキリムシは例年より発生量が多い(写真1)。

凍霜害によるキクの障害(シカミ)は例年より多い(図1)。

福井市東郷地区では挿し芽が4月10日、定植が4月下旬に行われた。暮れ植え栽培は、草丈が生育の良いもので26cm前後。病害虫ではアブラムシが少発、ナモグリバエ産卵痕は少ない。

大土呂地区では4月14~16日に「あかり」、「小鈴」、「小雨」等の品種が4月8日~13日に定植された。

丹生の越前町宮崎地区では、4月15日時点で4月7~14日から定植が開始された。品種は「花風」、「小鈴」、「恋心」、「花絵」、「恋心」、「やよい」、「かなえ」、「秀水」等である。4月17日の強風の被害は特になかった。

越前市では4月下旬に定植された。一部の苗は挿し芽後穂の腐りが多くなった。

二州地区では、8月咲き小ギクの「水鳥」、「翁丸」、「くれない」等が4月22日に挿し

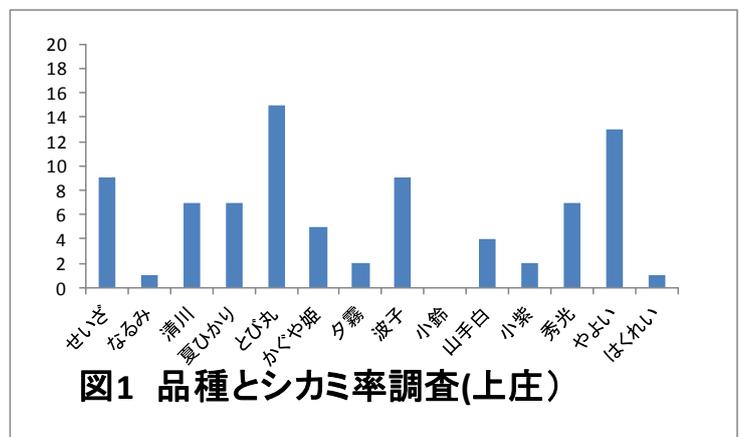


写真1 キク圃場で確認されたネキリムシ

芽、下旬に定植された。

若狭地区では、8月咲き「くれない」、「さきかぜ」、「翁丸」等が、4月17日より定植されている。暮れ植えギクは、「はるき」、「はなふさ」、「清風」等が栽培されており、「とび丸」の出芽が少なかった(4月17日調査)。

2 ユリ

奥越の1月下旬播種のシンテッポウユリ「オーガスタ」は、4月21日に苗が配布された。定植は4月25日から始まった。約1万5千本植付予定。

春江では、9月17日定植の「アイランナー」は草丈18cm、葉数18枚、「エルディーポ」16cm、16枚。3月10日定植の「ブラックアウト」で16cm、72枚。3月17日定植のオリエンタル系「シベリア」は発芽始め。

病害虫はアブラムシ類が少発生。

3 トルコギキョウ

あわら市では抑制栽培の切り下株の草丈が「レイナホワイト」で15~20cm、対葉数7~11枚である。2本仕立ての整理作業が4月11日から行われた。病害虫では灰色かび病、炭そ病が微発生。

大野市では、購入苗の配布が4月中旬に行われた。品種は「ロジーナブルー」、「ロジーナーピンク」等である。

越前市では、二度切り栽培の「バルカンマリン」が9対葉草丈11cm、「ボヤージュグリーン」が6対葉、12cm、「てんてまり」9cm、7対葉。昨年と比較してやや短い。

昨年11月15日に定植された6月咲品種「ボヤージュグリーン」が13対葉、「プティフル」シリーズが8対葉、12cm。

二州地区では4月14日調査で11月中下旬に定植された「ブルーシルエット」6~7対葉、9~10cm、「ピンクシルエット」が7~9対葉、7~9cmで側枝の発生多い。

1月18日播種の苗は生育が悪く、脱ロゼット化が遅れ生育が悪い。

若狭地区では、5月咲作型で(4月14日調査)で3月上中旬に播種された。

4 ヒマワリ

あわらのヒマワリは3月上旬播種もので4対葉、22cm~25cmであった。

5 その他の切り花品目

春江のフリージャは収穫終了。

小浜のストックは、11月上旬播種が4月上旬より開花。草丈60~80cm。11月定植のスターチス「アメリカンビューティ」「イエロービューティ」は4月上旬色着き始め。草丈60~70cm。開花は昨年より遅い見込み。

キンギョソウ「アスリート」シリーズはあわらで3月中旬から開花、100~120cm、二州で4月上旬から開花。草丈100~120cm。

対 策

1 キクの管理

1) 夏秋ギクのエスレル処理による開花抑制

- (1) 7月咲き輪ギク品種の「スーパーイエロー」や小ギク「小鈴」等の品種で実用性が高く、摘心後1~2回のエスレル10を処理することにより、開花の抑制と切り花品質を向上させることができる。品種、作型により開花抑制の効果に差異があるので、注意する。
- (2) エスレル10処理の時期は、摘心直後に1回目の処理を行い、2回目は14日後に柔らかい茎葉を中心に全面散布する。ただし、同一品種の開花ピークをずらす場合は、2回目10日後処理と14日後処理を畝別に行う。
- (3) 高温に遭遇していた苗や老化苗は、エスレル10の効果が低くなる場合があるので注意する。
- (4) エスレル10の散布方法は、水道水やきれいな水で500倍に希釈する。散布時期は夕方がよく、葉先から少ししたり落ちる程度に全面散布する。
- (5) 調整した薬剤はその日のうちに使用し、他の薬剤（農薬など）との混用は避ける。
- (6) 異常気象時（高温、低温、多雨、乾燥など）には効果が不安定なので注意する。また散布12時間以内に降雨のない条件で散布する。
- (7) 本年は盆ギクの開花前進化が危惧されるため、図4を参考にエスレル10を散布する。

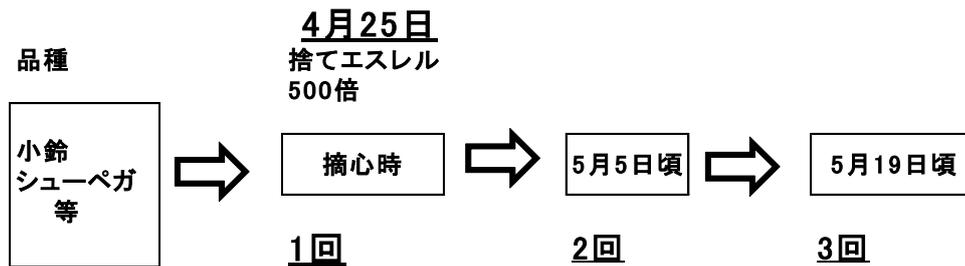


図4 8月咲きキクのエスレル散布モデル例

表1 エスレル10の散布方法

薬 剤 名	対 象 作 物	使 用 濃 度	使 用 時 期	使 用 方 法 及 び 注 意 事 項
エスレル10	キク	500~1,000倍	摘心時または定植後1週間以内及びその後10~14日毎	<ul style="list-style-type: none"> ・全面散布（株全体がぬれる程度）使用回数3回以内。 ・早期不時発蕾防止。
	キク（電照栽培）	500倍	親株摘心時	

2) ハモグリバエの防除

(1) ハモグリバエの防除

ハモグリバエは5月まではナモグリバエ、6月以降に発生する種はマメハモグリバエと優占種が遷移するため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。ディアナSC5000倍液を100~3000/10a散布する。ハモグリバエの幼虫が入った葉は二次発生と細菌感染の原因となるため、下葉かきをかねて除去する。できるだけ落とした下葉も圃場から除去する。

2 福井ユリの収穫までの管理

- (1)花蕾がのぞいてからは切り花をかたくするため、徐々に灌水を控えるようにするが、極端に灌水を控えると、葉やけの原因となるため注意する(これまでの灌水間隔が毎日なら、週3回というように間隔をあける)。特に曇雨天が続いた後、急激に晴れた時に日焼けしやすい。
- (2)生育が進むと地上部が重くなるため、曲がりが出る場合がある。ネット上げが遅れないようにし、支柱の間隔が離れている場合は、補強のために中間に杭を打つ。
- (3)萌芽初期に7~10日毎にダコニール1000、アフェットフロアブル、ポリオキシシAL水溶剤で防除するが、生育後半は薬剤による葉の汚れに気をつける。

3 トルコギキョウの管理

- (1)定植後の灌水是活着を良好にし、初期生育を促進させるため根が張るまで十分灌水する。特に、花芽分化が始まる本葉8対(草丈が15~20cm)頃までに水分や肥料が少ないと切り花のボリュームが不足するため、積極的に灌水を行なう。
- (2)2度切り栽培は、草丈が10~20cm時に生育が良い茎を残す整枝を行なう。多く茎を残すと切り花のボリュームが小さくなるので、残す茎数は、株当たり2本程度とする。ただし、株に勢いが無い時には整枝しない。
- (3)トルコギキョウは根張りが悪いと上葉が小さくなる「うらごけ」がおこる。圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施用する。特に春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥(OKF-1の500~1000倍など)を中心に追肥する。
- (4)定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度(最適EC0.3~0.5mS)1.0mS以上と高い場合に多く見られる。定植前に土壌調査を行い、ECが高い場合は、水をかけ流したり、表土5cm程度を削りとり、塩類を除去するとよい。
- (5)土壌酸度(pH)が低い時も同様な障害が発生する。土壌酸度はpH6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。低pHには薄い石灰水(苦土石灰などの石灰資材を100g/水10ℓに溶かす)10ℓを3㎡に土壌施用する。効果が不十分であれば再度施す。
- (6)立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。過湿にならないように管理して、丈夫に育てる。発病株は抜取り焼却する。
- (7)葉先枯れ対策には、日中に換気を十分行い、軟弱徒長気味の生育をさせない。また、雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいので、雨や曇天の日は、通風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、例年発生の多い品種では、カルシウム剤の葉面散布を定植1か月後から1週間ごとに行うとよい。

4 促成スイセンの球根掘り取りと球根の貯蔵前処理

- (1)掘り取った球根の乾燥は、高温処理を開始するまでに、球根の表皮が親指の腹で簡単にむける程度まで球根を乾燥させる。乾燥方法は、風通しのよい場所で、陰干しする(写真2)。直射日光があたると火傷状に傷が残り、腐敗の原因となるため、注意する。球根は高温とならないようにする。

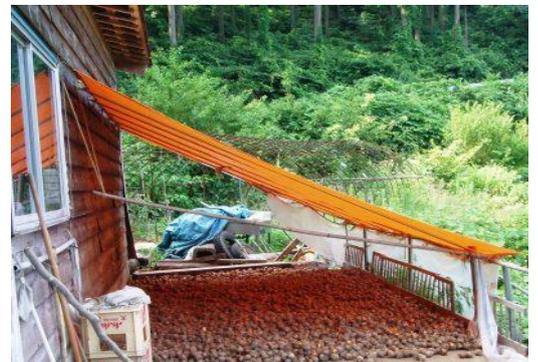


写真2: 球根を乾燥させるには直射日光を避けて、陰干しを行う。